

【用語解説】

<p>P H (水素イオン濃度)</p>	<p>水の酸性・アルカリ性の度合いを示す指標で、水質の安定性を評価する上で重要です。 P H 7 の時は中性で、それより大きいときはアルカリ性、小さいときは酸性になります。 河川水は通常 P H 7 付近ですが、温泉水の混入、流域の地質（石灰岩地帯など）、人為汚染（工場排水など）、植物プランクトンの光合成（特に夏期）などにより酸性あるいはアルカリ性になることがあります。</p>
<p>B O D (生物化学的酸素要求量)</p>	<p>水中の有機物が微生物によって分解されるときに消費される酸素の量を示し、有機物汚染の指標となります。 有機物汚染のおおよその指標になりますが、微生物によって分解されにくい有機物や、毒物による汚染の場合は測定できません。 逆にアンモニアや亜硝酸が含まれている場合は微生物によって酸化されるので、測定値が高くなる場合があります。 B O D が高いと悪臭の発生などが起こりやすくなります。</p>
<p>C O D (化学的酸素要求量)</p>	<p>水中の有機物を酸化剤で酸化する際に消費される酸素の量を示し、有機物汚染の指標となります。 酸化剤によって酸化される物質には無機物もありますが、大部分は有機物ですので、有機物による水質汚濁の指標となっています。 また、工場排水の指標としても用いられています。</p>
<p>S S (浮遊物質)</p>	<p>水中に浮遊または懸濁している物質の量で、濁りの原因となります。 粘土鉱物による微粒子、動植物プランクトンやその死骸、下水、工場排水などに由来する有機物や金属の沈殿物が含まれます。 浮遊物質が多いと透明度などの外観が悪くなるほか、魚類のえらがつまって死んでしまったり、光の透過が妨げられて水中の植物の光合成に影響することがあります。</p>
<p>D O (溶存酸素)</p>	<p>水中に溶けている酸素の量で、水生生物の生存や自浄作用に不可欠です。 水質汚濁の指標として用いられ、溶存酸素量が多いほど水質は良好とされます。</p>
<p>大腸菌数</p>	<p>水中の大腸菌数は水質汚染の指標として用いられています。 大腸菌数は、糞便のみに存在する菌種です。</p>
<p>T - N (全窒素)</p>	<p>窒素化合物全体の量で、富栄養化の指標となります。 し尿や肥料などに多量に含まれているため、生活排水、工場排水、農業排水などの流入により、水中の窒素が多くなります。</p>
<p>T - P (全リン)</p>	<p>リン化合物全体の量で、富栄養化の指標となります。 リンは、動植物の増殖に欠かせないもので、窒素とともに栄養塩と呼ばれ、その存在量は、富栄養化の目安として使われています。 水中のリンや窒素などの栄養塩が多くなると、富栄養化の状態となり、藻類の異常繁殖により赤潮などの原因となります。</p>
<p>全亜鉛</p>	<p>水生生物の保全を目的として、環境基準で定められている亜鉛の総量です。 亜鉛は、工場排水や生活雑排水など、様々な排出源から水中に混入し、水生生物及びその生息又は生育環境に影響を及ぼす可能性があるため、水質環境基準項目として、河川・湖沼・海域別に基準値が定められています。</p>
<p>電気伝導率</p>	<p>導電率は、水中に溶け込んでいる電解質の量と密接に関連しています。 電解質が多いほど、水はイオン化しやすくなり、導電率が高くなるため、水質の汚染度を測る指標として利用されています。 水に含まれる不純物（電解質）が多いほど電気を通しやすくなり、その値が高くなります。電気伝導率が高い水質は、水質汚染が進んでいる可能性があるため、注意が必要です。</p>
<p>B O D 負荷量</p>	<p>河川における有機物の汚濁量を表す指標であり、B O D の濃度と水量を掛け合わせて算出されます。 B O D 負荷量を把握することで、河川の水質汚濁状況を評価し、水質管理に役立てることができます。</p>
<p>窒素負荷量</p>	<p>主に化学肥料、動物性堆肥、生活排水、事業所排水など、人間活動によって河川に流れ込む窒素の量のことで、これは河川の水質汚染や富栄養化を引き起こす要因の一つとなります。</p>